

## サンクトペテルブルグ旅行記

2018年10月

T2 岩谷滋雄

バルト3国演奏旅行を終えた後、オプションツアーとしてサンクトペテルブルグ旅行を選んだ石原さん夫妻、藤原さん夫妻、府川さん、深堀さん夫妻、そして筆者（岩谷）とその妻の9名が旅行中に体験したことを時系列的に記述し、筆者の主観的感想も交えてまとめることとした。他の参加者の感想も適宜追加していただけたので、全体としてよりバランスのとれたレポートになったものと期待している。

9月21日（金）

午後4時、我々9名を乗せた特急列車「アレグロ」号は意外にも定刻通りにヘルシンキ駅を発車、一路サンクトペテルブルグを目指した。「意外にも」と言ったのは、旧東独など東欧圏が西欧の鉄道網に加わってから列車の遅れが常態化したと聞いていたからで、ようやくそのような欧州拡大の好ましからざる副作用も収まって来たのかもしれない。車内は満席で、色々な言語が飛び交って賑やかである。ヨーロッ



特急列車アレグロ号

パを走る列車は通常コンパートメント方式か、大部屋式の場合も固定席で、車両の半分の席は前向き、残りの半分は後ろ向き、中心部など何か所かは向き合った席になっているのが普通である。私と家内の席はその向き合った席の片側で、向かい側の席にはラテン系らしき若いカップルが仲良さそうに軽くハグをしたりしている。家内が得意のスペイン語で尋ねると、マイアミ在住のベネズエラ人ということである。女性の方は期限切れ寸前のパスポートの期限延長手続きをとったものを持っているとのことで、まず車掌が検札に来た時に車掌の顔が曇った。何かやり取りがあった後、今度は別の年配の係官がやってきてパスポートや添付書類を見つつ質問をしてからどこかにいなくなる、という動きを何度か繰り返したのち、最後に明るい顔でやってきて「問題ないことの確認が取れた」と伝えた。車掌は切符とパスポートのチェックをすると同時に、ロシア入国用の入国カードを配って回った。次に腰に拳銃を下げたフィンランド側の女性国境警備官がやって来てまた一人一人のパスポートをチェックし、出国のスタンプを押した。その間、列車は森と草原の単調な風景の中を時速200キロ近いスピードで走っている。広軌の中でも最も幅の広い鉄路

とのことで、揺れはほとんどなく、とても快適である。2時間ほど走ると、電子掲示板に「国境地域」という表示が出て、それとほぼ同時にロシアの国境警備官が姿を現した。やはり女性であるが、気のせい目つきがより鋭いように感じられる。にこりともせず一人一人のパスポートをチェックし、ガシャンと入国のスタンプを押して入国カードの半分をもぎ取って行った。くだんのヴェネズエラ人女性のチェックの際にはあの年配の係官が来て二言三言説明し、特に問題になることなく手続きが終わった。この間、我々にはヘルシンキからツムラーレコーポレーションの阿茂瀬（あもせ）さんという方が添乗してくれており、次に何が起こるかを逐次教えてくれたので私と家内に関する限り特に戸惑うことはなかったが、少し離れた席に座っていた他の皆さんはもっと緊迫度が高かったようで、藤原さん曰く、

「列車でロシアへの国境越えの際の緊張感は、半端では無かったですね。ロシア側の国境警備員女性達の「美人で笑わない冷たい眼」で睨みつけられ、パスポート写真と本人の顔を見比べる仕草には、且つて観た 007 の映画のシーンを連想させられ、悪いことはしていないのに身をすくめる思いでした。飛行機で空港から入国する方が楽だったのかも・・・、良い？経験でした。また、手荷物検査の際、石原家と当方は担当官と眼を合わさず何とか無事にやり過ごしましたが、深堀ご夫妻は荷物をしつこく改められ、スーツケースまで開けさせられて大変な思いをされました。」

鉄道による国境越えはめったにできない体験であったが、何事もなく通過できたのは幸いであった。ロシアの官憲も国際スタンダードを身に着けてきたということか。

ヘルシンキを出発してから 3 つほどの駅に止まただろうか、我々の列車は予定通り 3 時間半後にサンクトペテルブルグの駅に到着した。この駅はヘルシンキ行きの列車が出入り



りするところなのでヘルシンキ駅と呼ばれているそうである。今回我々が出発したヘルシンキ駅も到着したヘルシンキ駅もそうであるが、欧州のターミナル駅は大体において線路がそこで途切れる構造になっている。列車は客を下した後は逆方向に走っていくしかない。ウィーンの駅もそのような構造になっていて、その理由としてウィーンに来る人はいてもウィーンから出てい

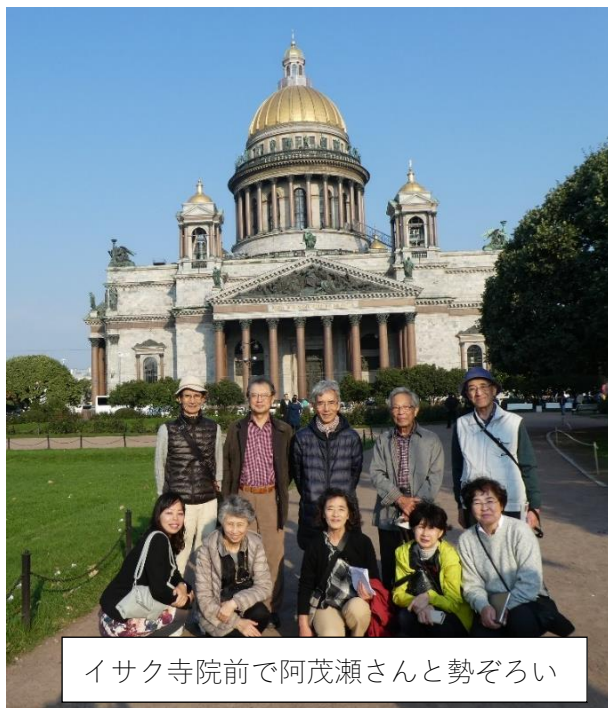
く人はいないからだ、等とまことしやかに語られていたが、実はヨーロッパの大きな都市の駅はほとんど全部そういう構造になっているのである。

サンクトペテルブルグ到着は午後 7 時過ぎだったか、空はまだ薄明るく、日の長さを感じさせた。現地のガイドさんに迎えられ、大型バスでホテルに向かった。ホテルまでは約 30 分の行程、途中の街並みは普通のヨーロッパの都市という感じ、旧共産圏の町という雰

囲気はあまり感じられない。後で知ったことだが、ペテルブルグは高さ制限があり、大体の建物は5, 6階建てである。我々が宿泊したアンバサダー・ホテルは9階建てで、恐らく元々の建物は3, 4階分継ぎ足したのではないかと思われたが、外から見てそれほど目立って高いという感じはしなかった。建物自体街並みの中に溶け込んでいてあまり目立たず、入り口もさほど大きくない。しかし、中に入ると広いロビーがあって堂々たるホテルという雰囲気を湛えており、部屋数も多かった。チェックインを代行してくれた阿茂瀬さんからキーカードを受け取り、皆5階のそれぞれの部屋に入ったが、荷解きもそこそこに9階の食堂へ。皆で簡単に遅い夕食をとった。まずはともあれ無事到着したことを祝って皆で乾杯、出された食事もおいしいものであったが、私自身は風邪のため食欲がない。まだ先が長いのでアルコールもウォッカを味わう程度に少量飲んだのみで我慢せざるを得なかったが、くせのないおいしいウォッカであった。この日は朝が早かった。エストニアのタリンで午前4時に起床し、6時ホテル発ということで、長い1日であった。早々に部屋に戻り、ベッドを確認すると、幸い枕がそれまでのホテルより低めで心地よい。ベッド自体はやや柔らか過ぎるように感じたものの、割合気持ちよく眠りに落ちることができた。

9月22日(土)

6時半起床。7時過ぎに朝食会場である9階の朝食会場へ。天気は良く、窓からの町の眺めも素晴らしい。上述の通り、このホテルは回りの建物より少し高くなっており、見晴らしがよいのである。朝食も冷たいものから温かいものまでバラエティがあって何をとるか迷ってしまう程。味も悪くない。特に、コーヒーがこれまでのホテルよりしっかりとした



イサク寺院前で阿茂瀬さんと勢ぞろい

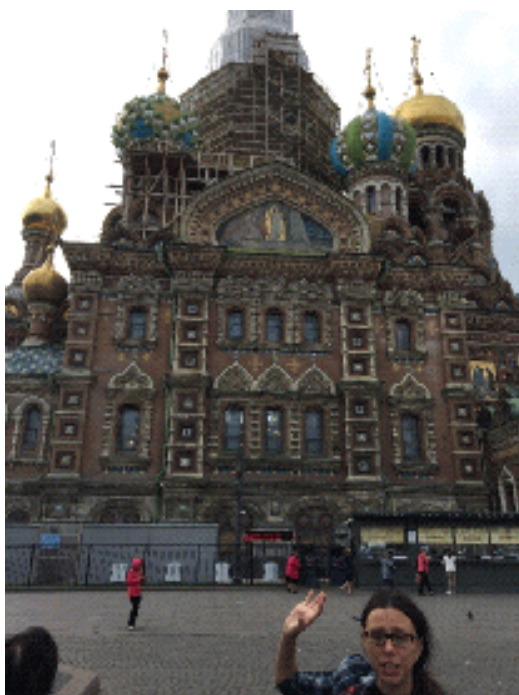
コクのある味で気に入った。我々が朝食会場に入った時には既に府川さんと石原さん夫妻が食事中であり、我々の後しばらくしてかなり混んできた時に藤原さん夫妻、そして深堀さん夫妻が現れた。この朝食に現れる順番が3日間毎日同じであったのは面白かった。

午前9時、大型バスにて市内観光に出発。今日と明日案内してくれるのはもう10年も地元で日本語の観光ガイドをしているという知的な雰囲気の女性で、通称リュバさん。正しいお名前はコルパシチコワ・リュボーフィさん、サンクトペテルブルク国立文化大学外国言語学学科助教授である。2日間の見学を通じ、

大変詳しい説明をメモも何も見ることなく分かりやすい日本語でされたのには舌を巻いた。

「ありまして」という時の「し」の音が伸びる癖があるのが耳に残っている。スリ・置き引きにはくれぐれも注意するようにとの話で、元外交官である私は絶対にパスポートをとられることがあってはならないと肝に銘ずる。

まずはサンクトペテルブルグの中心的な教会の一つであるイサク寺院。四角い構造の中心に大きなドームを置く形で、ウィーンのカールス教会を思い出させる。市内のどこからでも見える高さがあり、存在感を示していた。その周辺を歩いてピョートル大帝の騎馬像やネヴァ川の向こう岸にある建物などを見た後、バスに乗って「血の上の教会」に向かう。正式名は「スペース・ナ・クラヴィー大聖堂」と言うのだが、皇帝アレクサンドル 2 世が暗殺された場所に建てられた教会であることからそう呼ばれる。外観も素晴らしいが中のモザイクも素晴らしいということで、当初リュウバさんが中に入る予定はないとしていたのに対し藤原さんと府川さんが入りたいと強く主張、各人入場料を払って入ってみるとさすがに素晴らしいモザイクであった。一般に正教では偶像崇拜を否定しているのでイコン



(聖画像)とモザイクに力を入れる。感嘆しながら見ていたら外で待っていると聞いたはずのリュウバさんが突然姿を現し、色々と解説してくれた。我々がこうして屋内にいた間外では雨が降ったようだが、出たときにはその雨もあがっていた。そのようなことで予定の時間を超過したためサンクトペテルブルグ建設の起点となったペテロバヴロフスク要塞とその中に建てられている大聖堂はバスの中から見るだけとし、昼食を済ませてからバスで約 45 分かかるところにあるロマノフ王家の夏の離宮「エカテリーナ宮殿」に向かうこととなった。

宮殿の周りは公園都市のようで緑に恵まれている。宮殿に着くと、沢山の観光客が入場の順番を待っているが、やはり台湾人を含む中国人の存在感が他を圧倒している。リュウバさんの話によると春から秋のクルーズ船のシーズンになると毎日 15,000 人の観光客がサ

セントペテルブルグを訪れるそうである。幸い、我々は団体ツアーで事前登録しており、入場の時間も決まっているのでスムーズに入ることができた。中は、金箔で装飾された「黄金の間」から始まって全て豪華絢爛。ロマノフ王朝の栄華をしのぶことができた。そもそもロマノフ王朝は17世紀にミハイル・ロマノフによって打ち立てられたが、それまでは弱小貴族に過ぎなかったそうである。その後シベリアの木材や中央アジアの資源開発によっ



て富を築いたとのことで、ハプスブルグ家と勝るとも劣らぬ財力を持っていた。何しろ、何もなかった沼地にゼロから首都を建設し、パリやウィーンに匹敵する町に発展させたのだからその財力と権勢の大きさは想像を超えるものがあったのだろう。そんなことを考えながら、この宮殿の一番の呼び物である「琥珀（こはく）の間」に入る。エカテリ

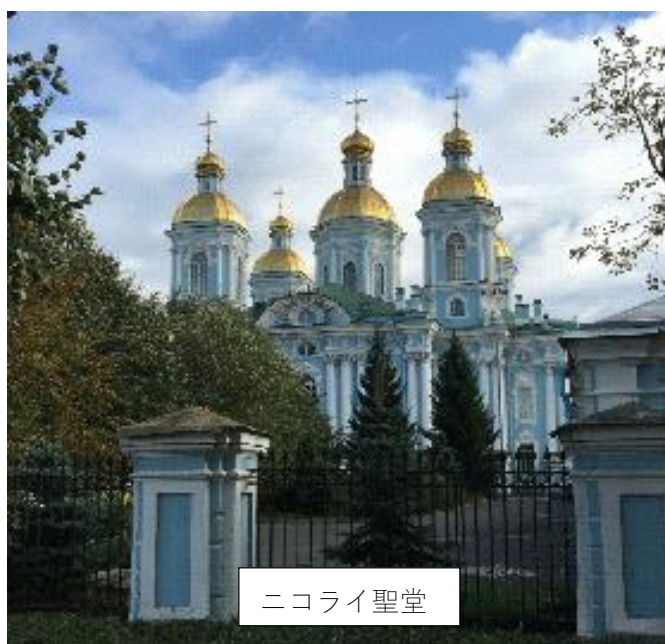
ーナ二世が完成させたこの部屋の琥珀装飾はナチスドイツによる900日に及ぶレニングラード包囲の際に全て持ち去られ、その後失われてしまった。のみならず宮殿自体も戦争で破壊されたので、戦後の建物自体の再建と琥珀の間の復元には合わせて60年の歳月を要したとのこと。琥珀にはヘルシンキやバルト3国でもお目に掛かったが、太古の森林の樹液が固まってできたものだそうで、バルト海の海底に沢山眠っているとのこと。そう思って見ると自然の力の凄さを感じる。なお、この部屋は謁見の間であり、江戸時代、日本から漂流してロシアに流れ着いた大黒屋光太夫（こうだゆう）がエカテリーナ二世に謁見した場所でもあるそうだ。この光太夫の話は井上靖の小説を基に「おろしや国酔夢譚（すいむたん）」というタイトルで1992年に映画化されているとの説明もあり、是非見てみたいものだと思った。

離宮の建物内の見学を終えて外に出るとそこは幾何学的に樹木が配置されたフランス式庭園が広がっている。中国人が立ち入り禁止の看板を無視して芝生の中に入り、花と一緒に楽しそうに写真を撮っている。「醜い日本人」と言われた我々も昔はこうだったのかな、等と考えながら更に遊歩道に沿って歩いて行くと池のほとりにちょっとした建物があり、リュウバさんがこの建物（エルミタージュ・パビリオンという名前で、エルミタージュは「隠れ家」の意味）は音響がとても素晴らしいので中で歌を聞いていきませんか、と誘う。中に入ってしばらく待っていると現れたのは男声カルテット。素晴らしい声量とハーモニーである。「グロット（オランダ語で隠れ家の意味）のアンセム」というグループだそうで、CDも販売していて一瞬買いたいと思ったが現金が足りなかったのをやめてしまった。藤原

さんの記憶によると彼らが歌ったのは『ヴォルガの舟歌』で、「音量の凄さと素晴らしいハーモニーには痺れましたね。これぞ「ロシア民謡」！と思いましたが、リューバさんによればロシア人は余り知らず、逆に日本人には良く知られているとか・・・。」とのこと。リューバさんは「カチューシャ」についても、ロシア人はエカテリーナの愛称であり、ソ連が開発したロケット砲の名前であることは知っているがロシア民謡としてのカチューシャは知らない、と説明。ロシア人はロシア民謡よりも戦争の歌をよく歌うとのことである。革命歌のことであろうか？

こうしてエカテリーナ宮殿の見学を終えた我々はバスで一路サンクトペテルブルグに戻り、市内のレストランで夕食をとってホテルに戻った。

9月23日（日）



翌23日は全日エルミタージュ美術館の見学である。美術館入場の時間が決まり、それに合わせてホテル出発時間を予定より30分遅くすることになったので、その時間を利用してホテルから徒歩で行けるといいうニコライ聖堂に向かった。途中で深堀夫妻と出会い、一緒に教会の前まで行ったが、敷地は塀で囲まれており、入り口が反対側にあることが分かった。時間がなかったので反対側まで回って中に入ることは断念。船乗りの守り神である聖ニコライが祭られているとのことで、外見が

とてもきれいな教会であったので中を見られなかったのは残念だった。

午前10時にバスでホテルを出発。今日もリューバさんの案内で美術館内を見ることになる。美術館に着いてみると昨日の夏の離宮を上回る混雑ぶりである。入場時間が指定されているので順序良く入っていくのかと思いきや、時間に遅れて来るグループも多く、しかも多人数のグループもあるので入場は結構競争状態になる。そこで、日本人グループのガイドさん達が共通して呼びかけていたのは「よくまとまって、中国人グループに負けないう頑張ってください」ということであった。中国人グループがああ迫力でやってくると日本人はつい身を引いて譲ってしまうのであろう。我々は頑張ってほぼ予定時間通りに館内に入ることができたが、コート預かりやトイレも大変な混雑。後刻、見学途中のトイレ休憩の際一人ちょっと離れたトイレに入った藤原さんがこの混雑のためはぐれてしまい、ガイドさんが探しに行く、という事態も発生した。藤原さん曰く、「あの複数のツアー団が

入り乱れた中国系団体観光客数の凄さ、トイレ前の狭い廊下で大混雑の往来にもみくちゃになり、リーダーとしての面目も無く我が仲間達の姿を見失ってしまいました。パスポートも預けていて持っていないし、携帯電話も財布も家内に預けていたので連絡の取りようも無く、これはロシア抑留を覚悟しないといけないかと途方にくれ出した際に、ガイドのリュウバさんが発見してくれて命拾いをしました。それにしても午後の新館は別にして、エルミタージュ美術館本館はトイレが少なすぎる！！」

考えてみればこれがサンクトペテルブルグ旅行中の唯一のトラブルらしいトラブルと言えるかもしれない。それまでのトラブル続きのバルト 3 国旅行部分に比較すればこのサンクトペテルブルグ旅行はグループの人数が少ないこともあって上出来であった。もう一つ危機と呼べなくもないのは、見学途中にリュウバさんから突然、「スリがいますからもっと私の方に近寄ってまとまってください。」と言われたこと。リュウバさんがよく見かけるスリグループだとのことで、ちゃんと入場券を買って入ってくるそうだから館内と雖も油断できない。「別の日本人グループにくっついて行きましたからもう大丈夫です。」と言われて安心したが、はてさてその日本人グループは被害に逢わなかったのだろうか、と心配になった。

さて、美術館であるが、美術館とは言ってもかつての宮殿がそのまま復元されて、その宮殿の装飾品として美術品が飾られているので、宮殿見学のついでに美術品も見る、といった風情である。尤も、これは「冬の宮殿」部分の話であり、新エルミタージュや別館は美術館として再建されたそうだ。3 百万点のロマノフ王朝が集めた美術品が所蔵されており、全部見ようとすると 8 年かかる

ということなので、丸 1 日見てもほんの一部しか見られない。結果、本当に駆け足の見学となった。そのせいか、美術作品で印象に残っているものは「パヴァリオンの間」にある音楽時計「孔雀」と別館で見たマチスやピカソの作品くらいで、むしろ「玉座の間」や「大使の階段」に使われているイタリアの「カララ大理石」と呼ばれる大理石



の白の美しさがより印象に残っている。私は体調が悪かったので疲れがどんどんたまっていく感じで、最後にショップに行く人たちと武器のコレクションを見に行く人に分かれた際には、とてもそれ以上歩く元気がなく、ちょっとショップを覗いた後、ベンチで休息した。

私もヨーロッパやアメリカで有名な美術館を数多く訪問してはいるが、美術鑑賞を本当

に楽しめるレベルには遂に達することができなかった。そんな私にエルミタージュ美術館を総括的に評価する資格はない。そこで、ツアー参加者の一人で文化関係には大変造詣が深い府川さんに印象を伺ったところ、次のような率直な印象を語って下さった。

「ぼくの率直な感想でいえば、エルミタージュは「美術館」としてみるより、宮殿建築を含めた空間の芸術を楽しむに相応しい場という印象を持ちました。絵画だけでいえば、ウフィッチ、ルーブル、オルセー、ウィーン美術史美術館などぼくが知っているどの美術館よりも見劣りがしました。特に印象派は正直がっかりしました。この館独自の印象派のコレクションを持っていると考えていたからです。

ただ、この美術館は絵画以外に「極東と中央アジア」「イスラムの近東」「ビザンチン」など優れたコレクションを持っているようです。そこには絵画だけでなく、工芸品なども加えられているのではないのでしょうか。つまり、どちらかという「美術館」というより大英博物館のような「博物館」的な要素が強いのではないのでしょうか。それを見ていないので、エルミタージュ全体のことを言う資格はぼくにはないように思っています。」

さて、昼食時は美術館を一時退出し、近くのレストランで昼食をとった。この時だったか、前日の夕食だったか記憶が定かでないが、出た料理が「ビーフ・ストロガノフ」であった。これがロシア料理であることは知らなかったが、リュウバさんによるとステーキが好きだったストロガノフ伯爵が年老いて歯が抜け、それでもステーキが食べたいということで考案された料理であるとのこと。（ネット検索すると他にも諸説あるようだが。）老人向け料理であるという認識はなかったが、考えてみれば歯の弱い私には向いている料理であり、これからはもっと積極的にビーフ・ストロガノフを注文しようと思った。

夕刻、美術館を出た後は、夕食まで少し時間があつたので、近くのネヴァ川の川岸に係



留されている巡洋艦オーロラ号（7000 噸）を見に行くことになった。この軍艦はロシア革命の口火を切った船として保存されているのだが、日本人にとっては日露戦争の際、日本海海戦を戦ったバルチック艦隊のわずかな生き残り船の一隻という説明の方がインパクトがある。疲れていた私もさすがにこれだけは一目見ておきたいと思い、バスを降りたが、あまりの寒さに船

の写真を2枚ほど撮っただけで早々にバスに戻った。それでも、バルチック艦隊の出発点に来てそれに参画した軍艦の1隻を見ることができたことには大いに感動し、もう一度「坂の上の雲」のバルチック艦隊航海の部分を読み直してみたいと強く思ったものだった。そ



の後、ネフスキー通りという繁華街にあるエリセーエフ商店にも案内された。ロシアの大富豪エリセーエフ家が所有する高級食料品店であるが、この一族の一人であるセルゲイ・エリセーエフはパリ万博を見たのをきっかけに日本に興味を持ち、東京帝国大学に留学、夏目漱石の門下生ともなり、漱石には「紅毛三四郎」と呼ばれた由。欧米における日本研究の先駆者となったそうである。その話とは関係がないが、その商店のすぐそばの壁の高いところに一匹の猫の像がある。この像は 900 日に及ぶレニングラード包囲の時に食糧不足に見舞われた市民が犬や猫も殺して食べたことを記憶に留めるために置かれているとのこと。コインを投げてこの猫像の台座に載せることができると幸運が訪れるそうである。(実はこの時私は体調不良でリューバさんの説明はほとんど聞いておらず、帰国後家内に聞いたりネットで調べたりして、この場所を訪れた理由がわかった、という次第である。)この目抜き通りも色々面白いものがあるようだが見る時間がなかった。尤も、このようなところはスリも多いのでゆっくり見学を楽しむという訳にはいかないかも知れない。

こうしてサンクトペテルブルグ見学二日目も終わった。幸いにしてにわか雨が降った以外は晴れていて、気温は 15 度前後で風を受けるとかなりの寒さを感じたが、耐えがたいものではなかった。晴れ男と言われる府川さんが参加していたお蔭かも知れない。リューバさんの説明は面白かったし、要所要所で阿茂瀬さんの適切な指導が入り、大過なく日程をこなすことができたのは幸いであった。最後の夕食の機会にお二人に皆で感謝の気持ちを伝えた。リューバさんからは一人一人に完ぺきな手書き日本語メッセージを付けた絵ハガキが配られた。

9月24日(月)

朝 9 時にホテルを出発し、空港に向かう。あまり渋滞もなく 10 時頃には空港に着いた。フィンランド航空のカウンターはまだ閉まっていたが、既に日本人のグループが一組並んで待っている。我々はその後ろに付いたが、あっという間に後ろに長い行列ができたので、早めに来てよかったと思った。チェックインから搭乗までは極めて順調で、残ったループルを使い果たすための買い物も余裕をもってすることが出来た。12 時 20 分、飛行機は定刻通り離陸、一路ヘルシンキに向かった。ヘルシンキ空港ではさすがに日本食に飢えていた我々はもうすぐ日本に戻るにもかかわらず寿司やラーメンを食し、少しほっとした気分になった。そのうち、ノルウェー・フィヨルドツアー組やヘルシンキに留まっていた小室夫妻も合流し、サンクトペテルブルグ・オプションツアー部分は無事終了したのであった。

ウィーンに住んだことのある私にとってはバロック様式やロココ様式の建物・内装は見慣れたものに過ぎなかったが、ロシア正教教会の美しさには新鮮な感動を感じた。オーストリア在勤中マケドニアやコソヴォで見た正教教会のこじんまりした素朴な雰囲気とも異なり、絢爛豪華なものであった。そして、ハプスブルグ王朝と同じように権謀術数の世界であったと思われるロマノフ王朝の歴史についてもっと知りたいと思うようになった。東欧諸国・プロイセン・バルト 3 国・北欧諸国の関係史についても興味が沸いてきた。旅行

の効用はこのような興味を掻き立てられるところにあるのであろう。バルト 3 国を取材したテレビ番組を旅行の前に見たときは眠くてしょうがなかったが、旅行から帰った後で見直してみるととても楽しく、興味を持って見る事が出来たことはその証左である。これからは余り海外旅行もできなくなるかも知れないが、幸い今までの旅行の蓄積があるので多くのテレビの海外取材番組を楽しみたいと思う。また、これからは日本国内をせいぜい旅行して日本の歴史や地理や文化に対する興味を掻き立てることにしよう。

(2018 年 10 月 26 日記)